令 和 6 年 度

高等学校推薦入学試験問題

国　語

受験上の注意

◎ 時間……45 分

◎ 解答はすべて，別紙解答欄に記入すること。

◎ 字数制限のある場合，句読点，カギなどの記号も字数に入れるものとする。

第一問題　次の文章は乗代雄介『皆のあらばしり』の一節である。個人研究用のテーマを探し、注1皆川城址を訪れていた高校の歴史研究部に所属する浮田は、観光のため皆川城址を訪れていた、高校時代、歴史研究部員であったという男から声をかけられた。その男に後日、案内役を求められた浮田は、その男とともに注2琴平神社の参道を訪れるが、そこで歴史研究部の後輩である竹沢と遭遇する。それに続く【場面1】を読んで、後の問いに答えなさい。

【場面1】

「おいコラ、待たんかい」と男は言い、慌てて迂回路に入って行った。

上に着いたらバカにしてやろうと考えていたぼくの目論見はしかし、上りきって平らに均された頂上に出たところでまったく消え失せてしまった。一番奥、注3拝殿の前に誰かいると思った瞬間、ピンクのブルゾンの下に見慣れた学校指定ジャージの紫色が目に飛び込んできて、その人物が振り返ったからだ。

お互い呆気にとられたわずかな間に、男が石段を少し下ったところから出てきた。

「おい、ごっついでこっちの道、鹿のクソだらけで足の踏み場もないわ。玉砂利か思たがな」

何が嬉しいのか弾んだ声の男は、振り返ったぼくの様子を見て一転、怪訝そうに①「なんやねん」とつぶやいた。「どないしてん」

「浮田先輩」

ぼくの後ろの遠くから澄んだ声がして、男の目がそっちを見やるのに合わせて顔を戻す。

「先輩も調査ですか？」続けて問いかける眼差しは、すぐにぼくを通り越した。「こんにちは」と、こんなに怪しい男にも笑顔で挨拶する。

「こんにちは」関西弁のイントネーションで返すと、男は②＿＿＿＿案の定、明るい声で喋り始めた。「なんや、二人はお知り合いかいな。浮田くん、紹介してんか」

A　今初めて聞いた名を使う男に「同じ学校で、歴史研究部の後輩」と伝えた。

「竹沢です」

男は［B］の根一つ動かすことなく、頭を軽く下げた上目遣いに微笑を返した。
「あの、お二人は……？」
ぼくが言葉を選ぼうとしたそばから、男がすぐ横に音もなく出てきた。
「観光で来たんやけども、さっき偶然、浮田くんと下で会ってのー」と肩に手を置いてくる。「わしもこういう史跡にはちょっとばかし興味があるんで、なんやえらい意気投合してしもたんや。そしたら、親切に案内役を買って出てくれるやないか」
「私たち、部でこの辺りの郷土史の研究してて」
「さっきちらっと聞いたで、なんや、明治時代の古い資料を出版し直そうとしてるんやって？」
どうして男が無学を装っているのかわからず③黙っているうちに、二人の会話は弾んでしまった。さっきは男自らがした一通りの説明を、ずっとたどたどしく竹沢が説明し、男はしらじらしく初めて知ったとでも言うように感心しきりで相槌を打った。
「私がこの注4柏倉村の担当なんです。琴平神社の資料もありますよ」と竹沢は言った。「見ます？　ここ、由緒とか、詳しい説明の看板も何もなくて不親切だから」
「そんな貴重なもん、部外者のわしが見せてもろてええんかいな」
「もちろん」竹沢は人当たりのいい満面の笑みでうなずく。「みんなで勉強しましょ」
はっはーと男はわざとらしく感嘆の声を響かせた。「注5好学の士はみな仲間やと言うわけかいな。大した心がけや、そうでないといかんわなー」そして、わざわざぼくの方を向いて言った。「ほんまに君たちはすばらしいわ。日本も安泰やでほんまに」
竹沢は大袈裟な男の様子をけらけら笑い見ながら、石段脇にある大きな方柱形の石の上に地誌を入力し直した資料をのせて、傍らにしゃがみこんだ。ぼくが持っているのと同じものだ。
〈　中略　〉
「しかし、さすが担当なだけあって何でも知っとるんやなー。浮田くんの出番があれへんがな」
「あ、すいません」竹沢は顔の前で手を合わせ、ぼくに謝る仕草を見せた。
「いいよ、別に」

「ここはかわいい後輩に花を持たせたらええがな」男は馴れ馴れしくぼくの首の根元に大きな手を置いた。そして竹沢に隠れて何か伝えるように、ぼくの首の肉を何度かつまみながら、竹沢に向かって言った。「実は、浮田くんとはこの後、担当の皆川城祉を案内してもらう約束をしとるんや」

「わ、いいですね」と竹沢は言った。「そういえば先輩、個人研究って皆川城址にしたんですか？」

「まだ迷ってる。竹沢はここにするのか」

「はい、来週から資料を集めて、色んな人に聞き取り調査をしてみようと思ってます」

「おもしろそうだもんな」

男は、ぼくたちの顔を交互に見てにやりと笑った。

「そんなら、④君ら一緒に琴平神社の研究をやったらええやんか」

ぼくは⑤面食らったが、竹沢はすぐに「あ、いいですね」と言った。

「個人研究ゆうたって、同じことに興味を持ったらいかんなんちゅうことはないし、そうやったら協力し合うのが筋ちゅうもんや。君らの先生は、地誌の注6翻刻をしようなんちゅうこの世に注7資するとは何かをわかっとるえらい人や。共同研究はいかんなんて噴き上がるケツの穴の小さい人間ではないと思うで」

「ケツの穴」とウケながら竹沢がぼくを見る。「でも、それだと先輩がイヤじゃないですか？」

「ぼくは」イヤなわけがない。「別に」

「別にやなんて、素直やないのー」男が手をすりながらからんでくる。「はっきり言うてここはかなり興味深い場所やで。由緒も来歴も、明治になって急に栄えたんも気になるから注8栃木宿の商人連中との関連も見なあかん、調べなあかんことだらけや。わしが学生やったら嬉しい悲鳴あげてかじりつくとこやで」一気に言葉を並べたところで竹沢を見た。「おまけに、それをこんな優秀な研究者と一緒にできるなんてな？」

「ですよね？」

冗談にのせられておどけた竹沢が、男と顔を見合わせて何度もうなずく。身長差のせいで見上げる風になって、ややふくよかな

首筋の白さに目がいった。
「男や女やいうご時世でもないけども、向き不向きはあるもんや。鹿も出入りしとるようやし、足場の悪いとこもあるわ。協力できるもんはせんとなー」
「竹沢がいいなら、先生に相談してみよう」
「そうしましょう」
「二人は互いの連絡先なんかは知っとるんかいな」
さすがに竹沢も口ごもり、ぼくも黙っていた。男は⑥意に介さぬ態度でぼくたちのＬＩＮＥを交換させて、何度もうなずいている。
「ほな、これからしっかり研究するんやで。出版されるんならわしもチェックできるがな、楽しみやなー」
午後から予備校だという竹沢と一緒に、ぼくたちも下りることにした。男は上機嫌で迂回路から先導し、あちこちで山を作っている鹿の糞を指さしたり、道々ゴミを拾ったりした。竹沢はそれに感動して、ぼくに向かって、私たちも今度からやりましょうと言った。
「Ｘそん時は、透明なビニール袋を使わんといかんで」
「どうして？」
「どうしてもやがな」とだけ男は言った。「時に、竹沢はんの家はこっから近いんかいな」
「はい」と戸惑いつつ答えた。「皆川城址の近くです」
「そらええわ」男はぼくの顔を見ながら愉快そうに笑った。「研究にも便利やのー」
竹沢は、参道入口のある道の奥に自転車を駐めていた。家族共用のママチャリらしく、荷台にもカゴがついている。
「じゃあ先輩、また連絡しますね」と言い、男には「またお会いできたらいいですね」と笑って握りこぶしを引いて見せた。「研究、がんばりますからね」
町へ戻るまっすぐ長い道を、竹沢は自転車に乗ったまま何度も振り返って小さく手を振ってきた。バランスを崩してすぐ前を向

いてしまうから、竹沢はぼくたちが手を振り返したのを一度も見なかったかも知れない。
「ええ子やのー。心が洗われるようやないか」
「どういうつもりだよ」
「何の話や」
「注9ぼくが竹沢について黙っていたのを恨(うら)んでるのか」
男はにやにや笑って「何のことやらわからんわ」と言った。「わしは、さっきあの子が皆川城址の近くに家がある言うから、ようやっとそうかも知らんと思い至ったとこや。ちゅうことはなんや、やっぱりあの子は竹沢家の娘さんなんかいな。どえらい偶然があるもんやのー」
「白々しいよ」と男の方を見ないように言った。「また何か、変なことを企(たくら)んでるだろ」
「それやったら、そっちはなんで竹沢家が知り合いの家やということを隠しとったんかっちゅう話になるで」
「見ず知らずの人間にそんなこと教えるはずないだろ」
ぼくたちの横をサイクリストが二人連なって抜けていった。その姿が小さくなってから、男はわざとらしく溜息(ためいき)を聞かせた。
「ほな、白状するしかないのー」急にしおらしく肩を落とした。「確かにわしは、名前を聞いてすぐに気付いたんや。そして、こんなに物怖(ものお)じせず自分の意見を述べて歴史研究に注10邁進(まいしん)する立派な青年が、そんな注11些末(さまつ)な事実関係を隠すっちゅうことは、ひょっとしたら――ひょっとしたらやで？　青年が、あの子に好意を抱いてるんかと思ったんや。そうやとしても無理もないぐらいのええ子やしな」
「ぼくは一緒に研究したいなんて一言も言ってない」
「せやから、迷える子羊たちに手を差し伸べようという善意の第三者なんやからしょうがあれへんがな。わしにはお互いに、あの子の方でも好意を抱いとるように見えたんやけどなー」
答えようもなく黙っているぼくを、男は薄く口を開けたまま眺めていた。

注1　皆川城址…現在の栃木県栃木市にあった皆川城の跡。
注2　琴平神社の参道…栃木県栃木市にある神社。参道は神社に参拝する人のために作られた道。
注3　拝殿…神社で、礼拝が行われる建物。
注4　柏倉村…現在の栃木県栃木市にあった村。
注5　好学の士…勉学を好む人。
注6　翻刻…古文書などに残された古い時代の文字を読み取り、活字化すること。
注7　資する…役に立つ。
注8　栃木宿…栃木は地名。宿はここでは宿場町のことを言っている。
注9　ぼくが竹沢について黙っていた…竹沢は、かつて皆川城内の村にあった竹沢屋という酒屋の子孫。竹沢屋の話が浮田と男の間にのぼった際、浮田はそのことを黙っていた。
注10　邁進…恐れることなく突き進むこと。
注11　些末…取るに足らない、つまらないこと。

問一　傍線部①「『なんやねん』とつぶやいた」とあるが、ここでの男の心情はどのようなものだと考えられるか。最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア、男の冗談を真に受けて、参道に嫌気を感じている浮田を大げさだと思う気持ち。
イ、男の冗談を聞かないふりをして、黙々と先へ進んでいく浮田にいらだつ気持ち。
ウ、男の冗談を聞くことなく、ぼんやりとしている浮田の様子を不思議に思う気持ち。
エ、男の冗談を軽くあしらって、自分の都合通りに行動する浮田をとがめたい気持ち。

問二 傍線部②・⑤・⑥の本文中における意味に最も近いものを、次のア～エからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

②案の定　ア、予想に反して　イ、予想した通り　ウ、提案に反して　エ、提案した通り

⑤面食らった　ア、急に恥ずかしくなった　イ、我を失いそうになった　ウ、理解できず戸惑った　エ、突然のことに驚いた

⑥意に介さぬ　ア、まったく相手にしない　イ、気にとめて無視しない　ウ、理解を広げようとしない　エ、意見を伝えようとしない

問三 空欄 A にあてはまる表現として最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア、ぬけぬけと　イ、おずおずと　ウ、こそこそと　エ、ずるずると

問四 空欄 B にあてはまる語として最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア、顎（あご）　イ、眉（まゆ）　ウ、頬（ほお）　エ、喉（のど）

問五 傍線部③「黙っている」とあるが、なぜ浮田は黙っていたのか。その説明として最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア、言葉を選ぼうとしたそばから竹沢に自身の身の上を語り始める図々しさと、妙に馴れ馴れしく接してくる男に違和感を覚えつつも、無学を装うことの理由がわからなかったから。

イ、男が皆川城址の歴史研究をめぐって、浮田と意気投合したことを竹沢に語る姿を見て、そのことを嬉しく思いつつも、無学を装うことの理由がわからなかったから。

ウ、男のことを竹沢にどう説明したら良いかと考えているうちに、話の主導権を握られてしまったことに対して焦りを感じつつも、無学を装うことの理由がわからなかったから。

エ、自分が観光案内を買って出たことに感謝しているという旨を、竹沢と男の会話を通して知り、少し照れくさいと感じつつも、無学を装うことの理由がわからなかったから。

問六 傍線部④「君ら一緒に琴平神社の研究をやったらええやんか」とあるが、男が二人に対して共同研究を提案したのはなぜ

か。三十字以内で説明しなさい。

問七　傍線部X「そん時は、透明なビニール袋を使わんといかんで」とあるが、この箇所について、**【場面1】**と同作品で別の場面である次の**【場面2】**を参考にして生徒たちが話し合った《会話文》を読み、後の問いに答えなさい。

【場面2】

「あんたが透明なビニール袋でゴミ拾いする理由がわかった」

男は資料に目をやりながら「ほーん」と気のない返事をした。

「二人で琴平神社に行った時、偶然、管理に関わってる地元の人が来てた。すれ違ったあとで、ゴミを拾ったビニール袋を見て、機嫌良く話しかけてくれた」

「そら運がええのー。ゴミ拾いの甲斐があるというもんや」

「あんたは全部、そんな風に打算的な考えで生きてるのか」

男は首を傾げつつ、資料を脇に置いた。それから、僕との間にあった足を反対に注12除けるようにして組み、腿の上に組んだ腕を預ける。こちらを下から覗きこんできた顔には、いつもの薄ら笑いが浮かんでいた。

「確かに、そんなことはみな打算的に始めるのかも知らんわ。でもな、今回はたまたま運が良かったけども、打算っちゅうのは⑦ Y 中 Z 九、空振るもんや。大半の人間はそこでやめてまうから打算に留まるんやで。それを空振りしてなお続けてみんかい。打算でやっとったら割りに合わんことばっかりなんやから、そんな考えはすぐに消え失せるわ。積み重なる行為の前には、思考や論理なんてやわなもんやで。損得勘定しかできん初手でやめてまうアホは、そんなことも理解できんと、死ぬまで打算の苦しみの中で生き続けるんやけどなー」

その答えは、ぼくの想定を超えていた。打算で何が悪い、そう開き直るんじゃないかと思っていたのだ。

注12　除ける…「よける」とも「のける」とも読むことができる。

《会話文》

生徒ａ：「男が透明なビニール袋を用いるよう浮田たちに促したのはなぜだろう。」

生徒ｂ：「透明なビニール袋じゃないとゴミ拾いをしているって気づいてもらえないからじゃないかな。」

生徒ｃ：「そうか。ゴミ拾いをアピールすることでその見返りを求めるという考えからだったんだ。」

生徒ａ：「そうかな。男はそれはあくまでもきっかけに過ぎず、やがて消えてしまうことだと言っているよ。」

生徒ｂ：「ほんとだね。たとえ見返りがなかったとしても、［Ｉ］から、そういう考えは消えてしまうんだね。」

（１）**【場面２】**の傍線部⑦「［Ｙ］中［Ｚ］九」の空欄［Ｙ］・［Ｚ］にそれぞれ漢字一字を補い、四字熟語を完成させなさい。

（２）《会話文》の空欄［Ｉ］にあてはまる表現を**【場面２】**の男の発言中の言葉を用いて三十五字以内で答えなさい。

国語の試験問題は次に続く。

第二問題　次の【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】を読んで、後の問いに答えなさい。

【文章Ⅰ】

注1上野村の畑を耕していると、私はふと村人の歴史を感じるときがある。

村に暮らした先輩たちが、木を伐(き)り、根を抜き、石をどけて、ここに畑をつくった。そして、土を耕しつづけた長い時間が、この場所を良好な畑に変え、いま私はその基盤の上で作物をつくっている。誰が畑を拓(ひら)いたのかも、この畑とともにどんな人々が暮らしていたのかも私は知らない。それなのに、畑の土が掘り起こされるたびに、私はここには歴史があり、畑をめぐる物語が積み重なっていると感じる。

その感覚は、畑だけがいだかせるものではなかった。私の山は雑木林で、昔は薪(まき)をとる場所だったのだろう。森のなかに入ると、株から注2萌芽(ほうが)して太くなった木が、そのことを教えてくれる。森のなかにもまた、人間たちの物語がかくされている。

それは家屋や集落のつくられ方にも感じることだけれど、村にいると私は、さまざまな歴史、さまざまな物語を受け継いで、いま私はここにいるのだ、という気持ちになってくる。

誰もが物語をつくりながら生きてきた。その物語が文字や映像で記録されることはほとんどない。その点では、死は個人の消滅である。しかし、個人の消滅がすべての終わりではない。それは人々が、一種の普遍(ふへん)を獲得していく道でもある。①その普遍的なものが、畑や山や集落や、道端の野仏などに刻みこまれている。そうやって人々は、歴史や物語をつくりながら、人の営みという普遍の世界を生きたのだという記録が、ここではみえている。

人間は個人として生きている。しかし、②個人をつくりだしている現実的な関係や自我を取り払ってしまえば、そこには普遍的な人の営みのなかに存在している自分がいる。

もっとも、もしも村で暮らすことがなかったなら、そんな感覚を私がいだくことはなかっただろう。私が生まれた東京の住宅地には、③そういう世界を感じさせるものはひろがっていなかった。周辺には畑も残り、農業も少しはおこなわれていたけれど、それは住宅地の住民には関係のない景色であり、私たち新住民にとっては、［A］にむかって走りつづけることだけが必要だった。

そして、それが④資本主義の社会でもあったのである。資本主義は、それまでの経済システムを破壊しながら、自分が市場の新

しい支配者になることをめざして活動していく。ここでは過去は乗り越えられるべきものでありつづける。重要なのは、現在であり、未来だけだ。そして、⑤現在とともにある自己だけだ。人間の普遍的な営みなど、ここでは視野に入らない。

ところが、そうなればなるほど、私たちは自分自身を見失った。個人が普遍の人間へと変わっていく物語がみえなくなったとき、私たちは普遍の営みを自分自身のなかに発見できなくなって、漂流する個人でしかない自分に気づくようになった。そして、自分がなぜここで生きているのかもわからなくなった。そのことが⑥自分らしさ、自分探しといった言葉を流行させ、しかしそのことは自己肯定以外の何ものも生まなかったのである。

かつて、蔓（つる）や茅（かや）が大事だったころ、私の村には、蔓切りの日や茅切りの日があった。その日以降は、誰の山に入って蔓や茅を刈ってもよいとされた日である。山を所有しない人でも、村で暮らしていけるようにと生まれた習慣である。そうやって、村人は、森を利用し、村の営みを守ってきた。

だから、私はそんな過去を忘れないようにして、森とつきあおうとする。そういう人々が残した森を、私もまた残そうとする。そこに、個人を超えた普遍の人間の役割をみいだす。

（内山節 著『「里」という思想』より）

注1　上野村…群馬県多野郡上野村。一九七〇年代に筆者はここに住居を構え、東京都と往復しながらであるが、この村で暮らすようになった。

注2　萌芽…芽を出すこと。

【文章Ⅱ】

伝説と昔話と、二つはしばしば題材を同じくし、またはなはだよく似通うた注3叙法をもって語られるゆえに、それゆえに特にその境目をはっきりとしておく必要がある。というわけは根本に注4肝腎かなめともいうべき相違があって、⑦それを無視していては二つとも、とうていその成立ちを考えることができぬからである。前にも述べたことだが今一度要約して言うと、第一には伝説は人がこれを信ずる。昔話の方では「昔々あったそうな」、「舌を切って放したという」、その他注5ゲナとかチウとかを必ず附け加えて、自分は決して⑧実験者ではないのだから責任を負わぬ。もしくはただそういう噂だから信じない方がよいという意味を、むしろ丁寧すぎるほども反復していたに反して、伝説の方はうそだろうという時には怒られる。ただし以前は知っている者だけは皆信じたという時代もあったかと思うが、近頃は信ずる人の数が限られようとしている。同じ一家のうちでも老若によって態度がちがい、また一般に中心から遠ざかるにつれて、その紹介が冷淡になり、注6ほとんど昔話と同様に「そうな」を添えて話す者も今は多い。すなわち伝説には中心のあることが第二の特徴であって、これも最初からのものと思われるが、このごろさらに顕著になって来たのである。伝説の中心には必ず記念物がある。それは当然に神社仏閣・注7塚・墓その他の霊地、家も本家だけはもと信仰の機関でもあったゆえに、それぞれに注8伝説の花壇ともいうべき地位を占める。村が一つの中心になっているのも、この発生地の注9外廓としてであり、注10奇巌・老木・清き泉、橋とか坂とかの一つ一つも、⑨元は大きな織物の一模様のごときものであったろうかと思うが、現在は多くは独立してある伝説の記念物となっている。記念物が存在するからにはその伝説は確かだという推理法、もはや一般には注11承認せられているわけでないが、とにかく物が眼の前にある限り記憶には絶え間がなく、その記憶はまた信じていたという記憶でもあったので、一方のどこへでも注12持ってあるかれどこにでも通用して、ただ新しさとおかしさとによって珍重せられている昔話とは、はっきり区別することができたのである。

伝説の定義として注13挙げ得べき第三の点は、これもすべての信仰と同じように、人に説き明かすのに定まった形がないということである。昔話も今では叙述の長たらしいのを嫌って、単に要点だけを拾い上げて紹介する者が多くなったが、以前は「日本一の黍団子」でも、また舌切雀の「お宿はどこじゃ」でも、ちゃんと順序があり言うべき言葉がきまっていて、それが一つ落ちても逆になっても、幼い聴き手などは聴く方からちがうという。わざとちがえて言うとすれば、また一つの別の昔話になるので、その

点はむしろ手毬歌（てまりうた）や盆踊りの[注14]くどきというものに近かった。これに反して伝説は、知りかつ信ずるという心のうちの働きに過ぎぬゆえに、同じ話主でも相手と場合により、幾通りにも言いかえることができる。

（柳田國男 著『伝説』より）

注3　叙法…言い表し方。
注4　肝腎…肝心に同じ。非常に重要なこと。
注5　ゲナとかチウ…「〜のようだ」、「〜らしい」、「〜だそうだ」という推量や伝聞の意味をつけ加える言葉。
注6　ほとんと…ほとんどに同じ。
注7　塚…目印などにするために土を高く盛った所。
注8　伝説の花壇…ここでは伝説の代表的な記念物、中心地という意味。
注9　外廓…城や建物の周囲にめぐらす囲い。ここでは記念物のある村自体が一つの伝説の舞台となっているという意味。
注10　奇巌…珍しい形をした大きな岩。
注11　承認せられている…「承認されている」という意味。
注12　持ってあるかれ…持って歩かれ。つまり、「持って歩くことができ」という意味。
注13　挙げ得べき…「挙げることができる」という意味。
注14　くどき…ここでは盆踊り歌としてうたわれる民謡で、歌詞が一連の物語になっているものという意味。

問一　傍線部①「その普遍的なものが、畑や山や集落や、道端の野仏などに刻みこまれている」とあるが、その説明として最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア、村に存在する住居や畑や木々などをよく観察すれば、すでに消滅しているはずの昔の村人の姿を感じ取ることができるということ。

イ、村の木々の整備をしたり、畑を耕すことによって、自分自身も昔の村人と同様に健康的で明るい人生を送ることができるということ。

ウ、村に点在する畑や住居には、村での暮らしを進歩的なものにしようとした昔の村人たちの努力のあとが感じ取れるということ。

エ、村の集落や森の在り方には、個人の考えや意見よりも村全体の存続を大切だと考えた昔の村人たちの思想が読み取れるということ。

問二　傍線部②「個人をつくりだしている現実的な関係」とあるが、これに**あてはまらないもの**を、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア、両親と、その子ども「私」の関係。

イ、学校の担任の先生と、その生徒「私」の関係。

ウ、ある駅の駅員と、その駅を利用する旅行客「私」の関係。

エ、長年勤務する会社の上司と、その直属の部下「私」の関係。

問三　傍線部③「そういう世界」とあるが、これはどのような世界か。**【文章Ⅰ】**の中から十二字で抜き出して答えなさい。

問四　空欄 A にあてはまる語を、**【文章Ⅰ】**の中から漢字二字で抜き出して答えなさい。

問五　傍線部④「資本主義」に対して**【文章Ⅰ】**の筆者はどのような意見をもっていると考えられるか。最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア、資本主義は、常に新たなものを求めて突き進む傾向をもつため、過去を乗り越え、それまでは解決できなかった問題

を解決してくれるものとして肯定的にとらえている。

イ、資本主義は、常に新たなものを求めて突き進む傾向をもつため、現在の自分と昔の人々との大切なつながりを忘れさせてしまうものだと否定的にとらえている。

ウ、資本主義は、これまでのシステムの一切を破壊するため、それぞれの地域の間に存在していた格差を解消し、普遍的な世界をもたらすものだと肯定的にとらえている。

エ、資本主義は、これまでのシステムの一切を破壊するため、進歩をもたらすものだが、その運動の徹底性ゆえにいずれは自分自身さえも破壊するものだと否定的にとらえている。

問六 傍線部⑤「現在とともにある自己」とあるが、これとほぼ同じ意味をもつ表現を、**【文章Ⅰ】**のこの傍線部の後から六字で抜き出して答えなさい。

問七 傍線部⑥「自分らしさ、自分探しといった言葉」とあるが、**【文章Ⅰ】**の筆者はこの言葉が流行した理由をどのように考えているか。七十字以内で説明しなさい。

問八 傍線部⑦「それ」が指し示しているものを、十字以内で説明しなさい。

問九 傍線部⑧「実験」とほぼ同じ意味をもつ語を、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア、実現　　イ、実況　　ウ、体験　　エ、受験

問十 傍線部⑨「元は大きな織物の一模様のごときものであったろうかと思う」とあるが、ここに使用されている表現技法の名称を、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア、直喩　　イ、隠喩　　ウ、擬人法　　エ、体言止め

問十一　次の会話文は**【文章Ⅰ】**と**【文章Ⅱ】**を読んだ生徒たちの話し合いの様子である。これを読んで後の問いに答えなさい。

《会話文》

生徒ａ「現在、僕たちは新しいものが次々と出現してどんどん進歩していくような社会に生きているけれど、**【文章Ⅰ】**を読むと昔の生活や人々を思い出すことが大切だとわかるね」

生徒ｂ「そうだね。やっぱりいろんなものがめまぐるしく変わる中で生きていたら、自分の生きている理由とか自分の役割とかが分かりにくくなる。それをさけるためにも**【文章Ⅰ】**では、村や畑や森に積み重なっている『物語』を知ることが大切だと述べられているよ」

生徒ｃ「**【文章Ⅰ】**の『物語』はあんまり詳しく説明されていないけれど、**【文章Ⅱ】**を合わせて考えてみると、もっと深く理解することができると思う。**【文章Ⅱ】**は、いっしょにされがちな『伝説』と『昔話』がどのような点で異なるのか、を説明した文章だけれど、**【文章Ⅰ】**の『物語』は［　X　］じゃないかな？」

生徒ａ「たしかに、『株から萌芽して太くなった木』とか『蔓切りや茅切りの日』みたいな特定の物や日時を中心に『物語』が作られていると読みとることができるから、そう考えることができるかもね」

生徒ｂ「そして、**【文章Ⅰ】**の『物語』は本当にあったこととして語り継がれていると読みとれるから、この点からも、そういえるね」

生徒ｃ「でも、**【文章Ⅰ】**の『物語』と**【文章Ⅱ】**の『伝説』『昔話』にはある共通点があると思う。それは何だと思う？」

生徒ａ「『物語』とか『伝説』とか『昔話』が［　Y　］があまりないということが共通点じゃないかな」

生徒ｃ「そうだね。その点が僕たちが教科書で習うような『歴史』とそれらとのちがいだとも思う」

生徒ｂ「だとしたら、教科書や本には載っていない『物語』や『伝説』や『昔話』がまだまだ様々な地域に残っているかもね。いろんな場所に出かけて、その土地の人に話を聴いて、それらを探してみるのもとてもおもしろそうだね」

（1）空欄 X にあてはまる表現として最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア、「伝説」よりも「昔話」に近いもの

イ、「昔話」よりも「伝説」に近いもの

ウ、「昔話」や「伝説」と全く同じもの

エ、「昔話」や「伝説」と全く違うもの

（2）空欄 Y にあてはまる表現を、**【文章Ⅰ】**の中から十三字で抜き出して答えなさい。

第三問題　次の1～5の各文の傍線をつけたカタカナを漢字に直しなさい。

1、君のチームの実力は優勝校にもヒッテキすると思うよ。

2、そろそろタタミを張り替える時期になりましたね。

3、私はこの地域から犯罪をイッソウするつもりだ。

4、自然豊かなこの地でゆっくりリョウヨウするといい。

5、ひとりの卒業生から学校へ桜の木がキゾウされた。

令和六年度

高等学校推薦入学試験問題〔国語〕

解答欄

第一問題

問一

問二 ②

⑤

⑥

問三

問四

問五

問六 30 10 20

問七 (1) Y

Z

(2) 30 10 20

第二問題

問一

問二

問三 10

問四

問五

問六

問七 70 50 30 10 60 40 20

問八 10

問九

問十

問十一 (1)

(2) 10

第三問題

1

2

3

4

5

受験番号

名前

得点 ※

推国

※印欄は記入しないこと